



# しろめし町 しろいし町

しろいし町は、  
しろめしがうまい町。

しろめしがうまい町は、  
いい米がとれる町。

しろめしがうまい町は、  
美味しいおかずがある町。

しろめしがうまい町は、  
有明の海の幸にも恵まれた町。

しろめしがうまい町は、  
大好きな人と食卓を囲める町。

しろめしがうまい町は、  
子どもが大きく育つ町。

しろめしがうまい町は、  
お腹すくまで遊べる町。

しろめしがうまい町は、  
やりたいことに熱中できる町。

しろめしがうまい町は、  
一緒に食べたい仲間がいる町。

しろめしがうまい町は、  
帰りたいと思える町。

しろいし町は、  
豊かな土壌と人情に育まれ、  
人生が実る町。

しろめしがうまい町は、  
一緒に食べたい仲間がいる町。

どんな顔で  
食べてくれるか知りたくて  
農家と海苔漁師をしながら  
おむすび屋を始めた。

農家兼海苔漁師の森卓也さんは、  
元自衛官。被災地に派遣されたとき、  
食のありがたみを実感したのが、  
実家の海苔漁師を継ごうと思った  
きっかけ。いろんな土地に派遣され、  
故郷の良さがわかったことも  
白石町に戻った理由のひとつ。

弟の慎二さんも、長崎の造船所に  
勤めた後、農漁業家に転身。  
二人とも、就職したときは、  
自分が実家に帰るなんて、思っても  
みなかったし、ご両親から  
家業を継ぐよう言われたこともない。  
だけど、食にまつわる仕事を  
始めるのなら、山も海も平野もある  
白石町に戻ることは、ごく自然で、  
まったく迷いはなかったと言う。

今では、自分たちがつくる米や海苔を、  
どんな人が、どんな顔で食べるのか  
見てみたくて、おむすびの店  
「しろいしもり」も営んでいる。  
うれしそうにおむすびを買っていく  
お客さまの笑顔や、「おいしかった」  
という言葉を糧に、今日もまた  
夜の有明海へ収穫に出かける。

白石町職員 川崎 明さんご家族

町を出る理由がなかっただけ。  
だけど、子どもを育て始めたら、  
町を出たくない理由ができた。

しろめしがうまい町は、  
子どもが大きく育つ町。

白石町職員の川崎明さんは、生まれも育ちも白石町。町を出る理由がなかっただけです。と、すこし照れくさそうに笑うが、「待機児童」なんて聞いたこともない白石町で子育てできることは、恵まれていると思うとも話す。

ご近所に住む大人たちは、温かく見守ってくれるし、声もかけてくれるから、あいさつできる子に育つのは、ごく自然な流れ。子どもたちは、学年を問わず一緒に遊んで、小さい子は、大きい子をお手本に育つ。現代っ子らしくゲームをしたり動画を見たりも大好きだけど、広々とした平野を駆け回る遊びも知っている。お隣さんに野菜をもらうのも日常で、食べ物が美味しいからよく食べる。

よその町を知らないから、比べようもないけれど、白石町を出たいと思ったことはないですね。と、今度はすこし誇らしげに笑った。



しろめしがうまい町は、  
帰りたいと思える町。



雑誌記者から、れんこん農家に、  
四十歳でまさかの転身。今では  
八十歳までやりたい仕事になった。



東京で雑誌記者として  
働いていた頃は、まさか自分が  
四十歳で、実家のれんこん農家を  
継ぐなんて思ってもみなかった。  
と、話す山口真司さん。

十六年の経験を積んだ記者の仕事を手放すことには迷いもあっただろう。積極的に移住を望んだのは、意外にも、埼玉出身の妻、聡子さん。出産で夫の実家である白石町に滞在したときに、その魅力に触れ、夫婦で相談を重ね、生まれた娘が三歳になったとき、家族揃って白石町に帰郷。それこそ畑違いのれんこん農家だったが、人のつながりや、先輩農家の方々に助けられながら、今ではすっかりれんこん畑の風景に溶け込んでいる。

早朝には家を出て、日が暮れるまでまさに泥にまみれながら働く毎日だが、一瞬も迷うことなく、八十歳になるまでつづきたい。と、夫婦揃って苦労を笑い飛ばす。何歳になっても、人生は変えられる。そんな勇気をもらえる笑顔だった。

れんこん農家 山口 真司さん・聡子さん

精肉店 吉原 龍樹さん

牧場直営の精肉店の可能性を、  
日本中の牧場後継者に伝えたい。  
と、語るのは、白石町で  
精肉店「トミービーフ」を営む  
吉原龍樹さん。強い眼差しで  
食卓まで肉を届ける牧場の  
意義を語る中、父の牧場で、  
自らが世話をしていた牛が、  
精肉となって店に届いた日のことを、  
絶対に忘れないと目を潤ませる。  
食べられるためだけに生まれた命を、  
余すところなく食卓に届けるために、  
ランクだけにとらわれない  
新しい肉の価値のつくり方や、  
どんな部位でも美味しく  
食べられる方法を考えつつける  
肉屋でありたいと目を輝かせる。

大学で熊本、小売業への就職で  
宮崎、千葉、群馬、愛知と  
移り住んだが「自分」があれば、  
どこに住もうが関係ない。  
よそにはあって、白石町にないものは  
つくればいい。トミービーフは  
手段であってゴールではない。  
彼の挑戦はまだまだつづきそうだ。

育てた牛が肉となった瞬間を  
思い出すと、いまだに涙が出る。  
だから、妥協なんかできない。

しろめしがうまい町は、  
やりたいことに熱中できる町。